

目次

人智学と神秘主義の相違（味形修訳）	5
1 人智学は幻想的なものか	
2 人智学と観念論	
3 人智学と神秘主義	
仏陀（新田義之訳）	25
あとがき（新田義之）	66

人智学と神秘主義の相違

1. 人智学は幻想的なものか

人間の精神生活の発展史上、それ自体で完結した一つの時代が、ギリシャ人の認識努力から醸し出された「汝自身を知れ」という要請に始まり、十九世紀の終わりの三十年間に生じた自然科学的世界観から導き出された「イグノラビムス」告白に終わっている。

ギリシャの哲人は、人間の魂の在り方が生それ自体との調和を見出すのは、自己認識の中に示現する人間の本性の認識という形に、世界認識が登りつめた時であると考えた。

自然科学によって自分の信念を作らなければならないと思込んでいる現代の思索者は、人間の魂のこのような高まりを認めない。デュボアレイモンが「イグノラビムス」と言った時、次の信仰が彼のうちにあった。すなわち

（人間の総ての知識は、ただ二つの極——物質と意識（*Bewusstheit*）——の間で働くことができるにすぎない。しかも、この二つの極には人間の認識は届かない。人は長さ、数量、重さで計ることのできる範囲で物質の顕現を認めることができるが、こういう現象的顕現の背後において、一体何が「物質と

なつて空間内に立ち現れる（spuken）のか」は絶対に知ることができないだろう。同様に人は、「赤い色を見る」とか「バラの香りを嗅ぐ」等の体験、すなわち意識的な生活の中に生じる体験が、自分の心の中に一体どのようにして生じるのかも認識できないだろう。なぜなら、脳の中で、一定数の炭素や窒素や酸素や水素などが、どのように運動しているのか、運動したのか、運動するだろうか、それらの原子達にとって必然性を持つものであることを、一体どうやって人間は把握できるというのか。人は脳の中で原子がどのように運動しているのかは把握できるし、この運動を数理的な概念を通して規定することができる。しかし、火から煙が立ち昇るように、この運動からいかにして感情が生じてくるのかは想像することもできない。

もし人間が、この「認識の限界」を超えるべきならば、自然認識から霊認識へと進まざるを得ない。そして霊性について言及するところでは、知性は通用せず信仰がその場所を占めるに違いない。これらが、イグノラビムス（我々は知り得ないだろう）告白の内容である。

一般的に承認されている認識方法を用いて、現代の魂の状態がこのイグノラビムス告白を克服してしまつた、と我々は言うことはできない。確かにイグノラビムス告白を超えるためのあらゆる試みが為された。だがこれらの試みは、さまざまな認識方法の存在を云々する以上のことはしていない。これらの試みは、これらの方法を真の認識によつて実践的に行なうための力をもたらしはしない。このうちの幾つかの認識方法は、人間がその理念形成において、何かある独立した物質的でない本性を体験

することを、見通している。しかしながら、それらは理念体験の持つ靈的性格の中へ力強く踏み込んで行く実行力を持つておらず、したがって「諸々の理念は靈的なものである」という認識から出発したにしても、理念の中には実はほんのわずかしか表面に姿を現わしていない真の靈的世界を認識するところまでは、進んで行くことができない。

そこで得られる体験とは、自然現象が人間に近づいてくる時に、人間はそれに対して自分の内部から理念を呼び出して対応するということにすぎない。この体験によつては、理念自体の内にある生命を感じとることはできない。自然から理念へと進むように鼓舞されはするが、理念自体の内に活動している生命の中へと入って行くことはないのである。

これ以降は、ご購入の上、お読みください
みくに出版

人智学・神秘主義・仏教

ISBN978-4-8403-0396-5 C3010